

館林市大字赤生田字上の前

間堀遺跡発掘調査報告書

M A B O R I

1 9 8 2

館林市教育委員会

館林市大字赤生田字上の前

間堀遺跡発掘調査報告書

M A B O R I

1 9 8 2

館林市教育委員会

はじめに

館林市教育委員会

教育長 福田郁司

間掘遺跡の発掘調査が数々の成果をあげて終了いたしました。

この調査において、「縄文時代」という今を去ること数千年前に創造された文化が、今、私達の目の前に姿をあらわしました。

原始の時代、上古の時代という物質的な時間の距離が、私達に「縄文人」というと、原始的な、未開の、野蛮な姿をイメージさせます。

土器を造り、石器を造り、動物を追いかけ、木の実をとり、それを糧として生活をしていたということだけで、その人々を、未開の野蛮な人々ときめつけてはいけません。

そこに流れる意識は、自然に左右されながらも確実に、文化を創りあげていきました。

発掘調査によって発見されるものを、私達は、ただ「古いもの」「珍しいもの」として受けとまではなりません。

それを、縄文人たちの「生」への「知恵」と「執念」としてうけとめなければならないと思います。

「物質文化」と呼ばれるなかで画一的な生活をくりかえしている私達にとって、縄文時代の人々は、「生き」ていくための思想を示唆しているようにも思えます。私達は、その上に立って、再度考えなおす必要があるのではないかと思う。

それが最近呼ばれている「ふるさと再構築」とか、「ふるさと再発見」とか言われることへの基本になるといつても過言ではないと思います。

そのために、私達は、この遺跡の内容をしっかりと受け継ぎ、後の人々へ語り伝えて行きたいと思います。

最後に、肌をこがす猛暑の中、懸命に調査にあたって下さいました作業員の皆様や、あたたかく見守って下さいました関係者の皆様方に、深く感謝し、心からお礼を申しあげます。

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

（この記念冊子は、館林市教育委員会の発行する「教育情報」の付録として作成されました）

例　　言

1. 本書は、館林市大字赤生田字上の前地内に所在する間堀遺跡の発掘調査に関するものである。
2. 本発掘調査は、早川幸三郎氏を代表とした地権者により計画された、小規模な土地改良事業に伴う緊急発掘調査である。
3. 調査は、県教育委員会文化財保護課の指導のもとに館林市教育委員会が実施したもので組織は次の通りである。

教育長　　福田 郁 司

教育次長　　河内 卓 一（昭和57年6月まで）

島田 勇 吉（昭和57年7月より）

担当主管　　館林市教育委員会 文化振興課 文化財保護係

課長　　鎌田 正 弘

係長　　橋本 賢 一（昭和57年6月まで）

三田 正 信（昭和57年7月より）

社教主事　　落合 敏 男

学芸員　　岡屋 英 治（調査担当）・新藤 紀 子（調査補助）

主事補　　石井 洋 史（昭和57年7月より）（調査事務）

調査補助員　　齊藤 景 子

調査作業員　　川口 和子・島田とも子・市川与志松・葉巖嘉亮・葉巖たか

谷 きう・齊藤 カネ・坂村 フジ・越谷 長男・恩田 英男

寺田 国男・船田 清・柳田やい子・内村 君子・齊藤喜美枝

星 松宏・鎌田美代子・橋本 博行・田村 泰子・鈴木美津枝

岡田 光二

4. 調査期間は、準備期間に4月～6月、発掘期間7月～12月、整理期間10月～3月まで行なった。
5. 調査に伴う諸経費は、国庫補助、県費補助を得て館林市が負担した。
6. 遺物整理は、川口、島田が行い、本報告書の図面作成、トレースは、岡屋、齊藤、川口、島田が行った。写真撮影・編集は、岡屋、新藤、齊藤が行なった。
7. 本報告書中、ローム、搅乱、焼土等には、トーンを使用した。
8. 調査から、報告書刊行にあたり、諸氏、諸機関に御指導、御教示、御協力いただいた。感謝いたします。

本 文 目 次

はじめに	1
例 言	2
本文目次	3
図版目次	4
写真目次	5
第Ⅰ章 調査に至るまで	7
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	8
第Ⅲ章 遺跡の土層	15
第Ⅳ章 調査の内容	17
1. 調査の方法と経過	17
2. 遺構と遺物	19
第1号住居址	19
第2号住居址	21
第3号住居址	23
第6号住居址	25
第8号住居址	27
第9号住居址	29
第13号住居址	31
第2号土塙	33
第3号土塙	35
集石土塙	37
第Ⅴ章 調査のまとめ	39
おわりに	43

図 版 目 次

第1図	周辺の遺跡	12
第2図	館林周辺の地形	13, 14
第3図	土層柱状図	15
第4図	間掘遺跡調査区全体図	17
第5図	第1号住居址平面図及び断面図	19
第6図	第2号住居址平面図及び断面図	21
第7図	第3号住居址平面図及び断面図	23
第8図	第6号住居址平面図及び断面図	25
第9図	第8号住居址平面図及び断面図	27
第10図	第9号住居址平面図及び断面図	29
第11図	第13号住居址平面図及び断面図	31
第12図	第2号土塹平面図及び断面図	33
第13図	第3号土塹平面図及び断面図	35
第14図	集石土塹平面図及び断面図	37
第15図	縄文時代の海岸線と貝塚の分布図	39
第16図	縄文カレンダー	40
第17図	縄文時代の貯蔵穴	40

第1表	市内遺跡群の時間的推移	9
第2表	縄文時代時期別遺跡件数	10
第3表	住居址一覧表	41
第4表	出土遺物一覧表	42

写 真 目 次

写真1	遺跡の近景	7
写真2	遺跡から見た遠景（洪積台地）	8
写真3	内陸古砂丘断面	11
写真4	自然堤防	11
写真5	湿原及び池沼	11
写真6	遺跡の土層状況	16
写真7	調査風景(1)	18
写真8	調査風景(2)	18
写真9	調査風景(3)	18
写真10	第1号住居址	19
写真11	出土遺物(1)	20
写真12	出土遺物(2)	20
写真13	出土遺物(3)	20
写真14	出土遺物(4)	20
写真15	出土遺物(5)	20
写真16	出土遺物(6)	20
写真17	出土遺物(7)	20
写真18	出土遺物(8)	20
写真19	出土遺物(9)	20
写真20	出土石器	20
写真21	第2号住居址	21
写真22	出土遺物(1)	22
写真23	第3号住居址	23
写真24	出土遺物(1)	24
写真25	出土遺物(2)	24
写真26	出土遺物(3)	24
写真27	出土遺物(4)	24
写真28	出土遺物(5)	24
写真29	出土遺物(6)	24
写真30	出土遺物(7)	24

写真31	出土遺物(8)	24
写真32	出土石器	24
写真33	第6号住居址	25
写真34	出土遺物(1)	26
写真35	第8号住居址	27
写真36	出土遺物(1)	28
写真37	出土遺物(2)	28
写真38	出土遺物(3)	28
写真39	出土遺物(4)	28
写真40	出土遺物(5)	28
写真41	出土遺物(6)	28
写真42	出土遺物(7)	28
写真43	出土遺物(8)	28
写真44	出土遺物(9)	28
写真45	出土遺物(10)	28
写真46	出土遺物(11)	28
写真47	出土石器	28
写真48	第9号住居址	29
写真49	出土遺物(1)	30
写真50	出土遺物(2)	30
写真51	出土遺物(3)	30
写真52	出土遺物(4)	30
写真53	出土遺物(5)	30
写真54	出土石器	30
写真55	第13号住居址	31
写真56	第2号土塙断面	33
写真57	第3号土塙断面	34
写真58	集石土塙	38
写真59	縄文時代の住居内の様子	39

第Ⅰ章 調査に至るまで

遺跡の発掘調査はむやみやたらに実施されるものではない。

埋蔵文化財とは、地下に埋蔵された状態にある文化財である。過去の文化遺産が、風や河川の運ぶ土や砂によって、土中や水中に埋没した状態にあるならば、それはすべて埋蔵文化財ということになる。縄文時代の遺跡や古墳だけが埋蔵文化財ではないのである。

土中や水中は、密閉状態にあるため大変保存状態は良い。今をさかのぼる数千年も前の縄文時代の遺跡が現在まで残るゆえんである。

発掘調査は、その時代の生活の様子を知る「物」や「状況」は示してくれる。しかしながら長い間保たれて来た位置関係や、「物」の存在する状況を永遠に失なわせてしまう。

発掘調査は調査と名のつく破壊であると考えてよい。

間掘遺跡の発掘調査の契機は昭和57年3月までさかのぼる。

代表者は早川幸三郎氏より、間掘遺跡を含む地域の土地改良事業についての通知を受ける。

間掘遺跡は、市内の東南部、蛇沼の東岸に位置する縄文時代前期から中期にかけての遺跡で群馬県遺跡台帳にNo1119、市遺跡台帳にNo28として登載されている。遺跡は二箇所に分かれ、今回の土地改良はそのうち一箇所を含むものであった。

市教育委員会では、協議すべく現地調査を実施したところ、その時すでに、一部では採土作業が終了し、多数の土器片の散布がみられた。採土された部分は、台帳に登載された地域ではなかったものの遺跡の広がりを予想させた。協議の結果、採土作業は不本意でありながらも、

整地工事を中止する
よう要請し、掘削地
の断面を精査したと
ころ縄文時代前期か
ら中期にかけての遺
物が検出され、発掘
調査の必要性がある
ことが確認された。

4月より準備をは
じめ、7月調査開始
にふみきった。



写真1 遺跡の近景

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

館林市は、関東地方の中央部に位置し、群馬県の東端部、「舞う鶴の形」でいうなら、頭の部分にあたる地域である。

北は、渡良瀬をへだてて、栃木県佐野市、同足利市、東は、群馬県邑楽郡板倉町を経て、渡良瀬遊水で、栃木県下都賀郡藤岡町、茨城県古河市と、南は、邑楽郡明和村を経て利根川において、埼玉県羽生市と接する。

館林地域は、渡良瀬川、利根川という大河の影響をうけた、低台地と低湿地から成りたち、この比率は、ほぼ1:1の割合である。

台地は、太田市東南部高林から、大泉、館林、板倉へと延びる洪積台地で、「邑楽・館林台地」と呼ばれる。その形成は、下末吉海進時にさかのばるといわれ、砂やシルトの上に、中部、上部ロームを載せ、県内では此較的古い台地である。

この台地の西端に沿って、古利根川の自然堤防が基になった内陸古砂丘が存在し、この砂丘は、日本最古の、本州最大のものであるといわれている。



写真2 遺跡から見た遠景（洪積台地）

第1表 市内遺跡群の時間的推移

地形 上の 区分	遺 跡 名	旧石器 時	繩 文 時 代					弥 生 時 代	古 墳 時 代	奈 良 時 代	平 安 時 代
			早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期				
城 沿 沿 岸	当 錦 遺 跡										
	下 志 柄 遺 跡										
	花 山 東 遺 跡										
	大 袋 I 遺 跡										
	大 袋 II 遺 跡										
	三 杖 屋 遺 跡										
田 矢 場 川 沿 岸	屋 敷 添 遺 跡										
	善 長 寺 付 近 遺 跡										
	町 谷 古 境								古 境		
	富 士 山 古 境								古 境		
	山 王 山 古 境								古 境		
	加 法 師 遺 跡										
茂 林 寺 沿 岸	外 加 法 師 遺 跡										
	筒 野 遺 跡										
	屋 敷 前 遺 跡										
	八 方 遺 跡										
	朝 日 町 遺 跡										
	人 街 道 遺 跡										
近 藤 沼 沿 岸	愛 岩 神 社 古 境										
	腰 卷 遺 跡										
	筆 筒 原 遺 跡										
	下 尾 工 道 溝 遺 跡										
	大 原 道 東 遺 跡										
	面 煙 遺 跡										
多 々 良 古 河 沿 岸	近 藤 隆 子 遺 跡										
	佐 右衛 門 遺 跡										
	北 小 袋 遺 跡										
	苗 木 遺 跡										
	近 北 藤 第 一 地 点										
	近 北 藤 第 二 地 点										
多 々 良 古 河 沿 岸	富 士 山 古 境										
	水 潤 第 一 地 点										
	水 潤 第 二 地 点										
	上 箱 屋 遺 跡										
	山 神 騹 遺 跡										
	高 根 遺 跡										
多 々 良 古 河 沿 岸	外 和 田 遺 跡										

遺跡台帳及び発掘資料

飯塚多右衛門コレクション

第2表 桐文時代時期別遺跡件数

	早期	前期	中期	後期	晚期
遺跡件数	(6)	(7)	(5) (5) (4)	(5)	(4)
地形分類	城沼沿岸 旧矢場川沿岸 茂林寺蛇沼沿岸 近藤岸 内陸古砂丘上	城沼沿岸 旧矢場川沿岸 茂林寺蛇沼沿岸 近藤岸 内陸古砂丘上	城沼沿岸 旧矢場川沿岸 茂林寺蛇沼沿岸 近藤岸 内陸古砂丘上	城沼沿岸 旧矢場川沿岸 茂林寺蛇沼沿岸 近藤岸 内陸古砂丘上	城沼沿岸 旧矢場川沿岸 茂林寺蛇沼沿岸 近藤岸 内陸古砂丘上
10件	(0) (0)	(1) (1)	(2) (3) (3) (0)	(1) (1)	(0) (0)
5件					(1)



写真3 内陸古砂丘 断面



写真4 自然堤防



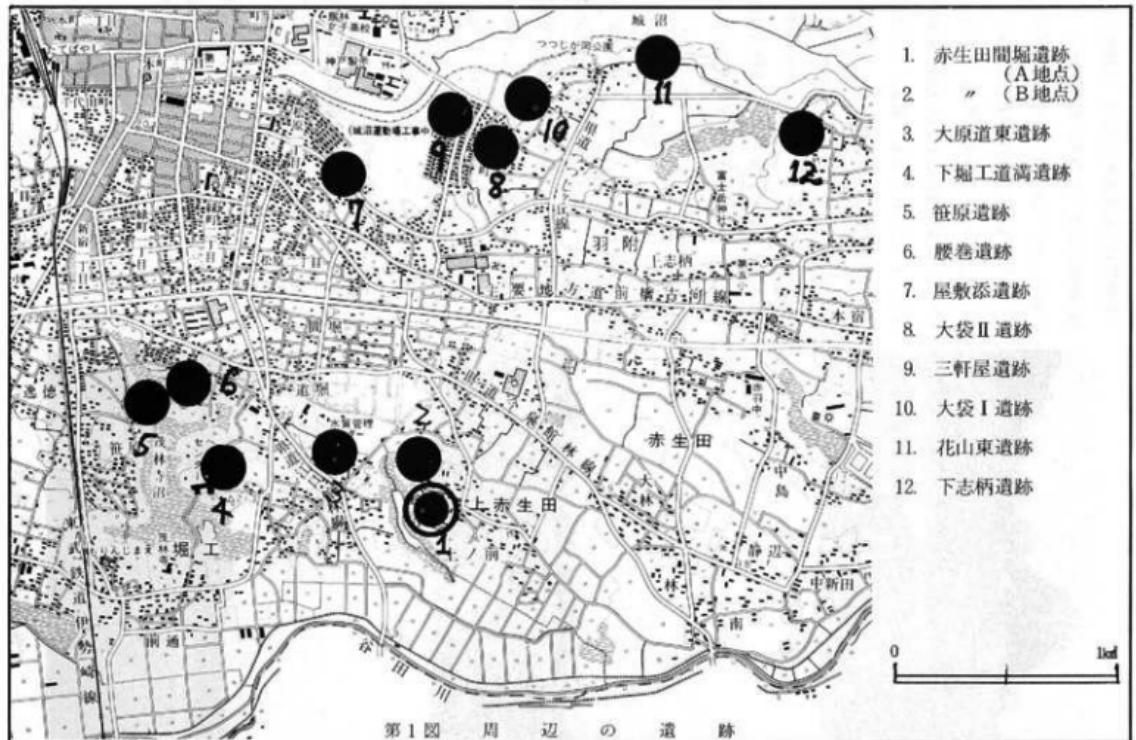
写真5 濡原及び池沼

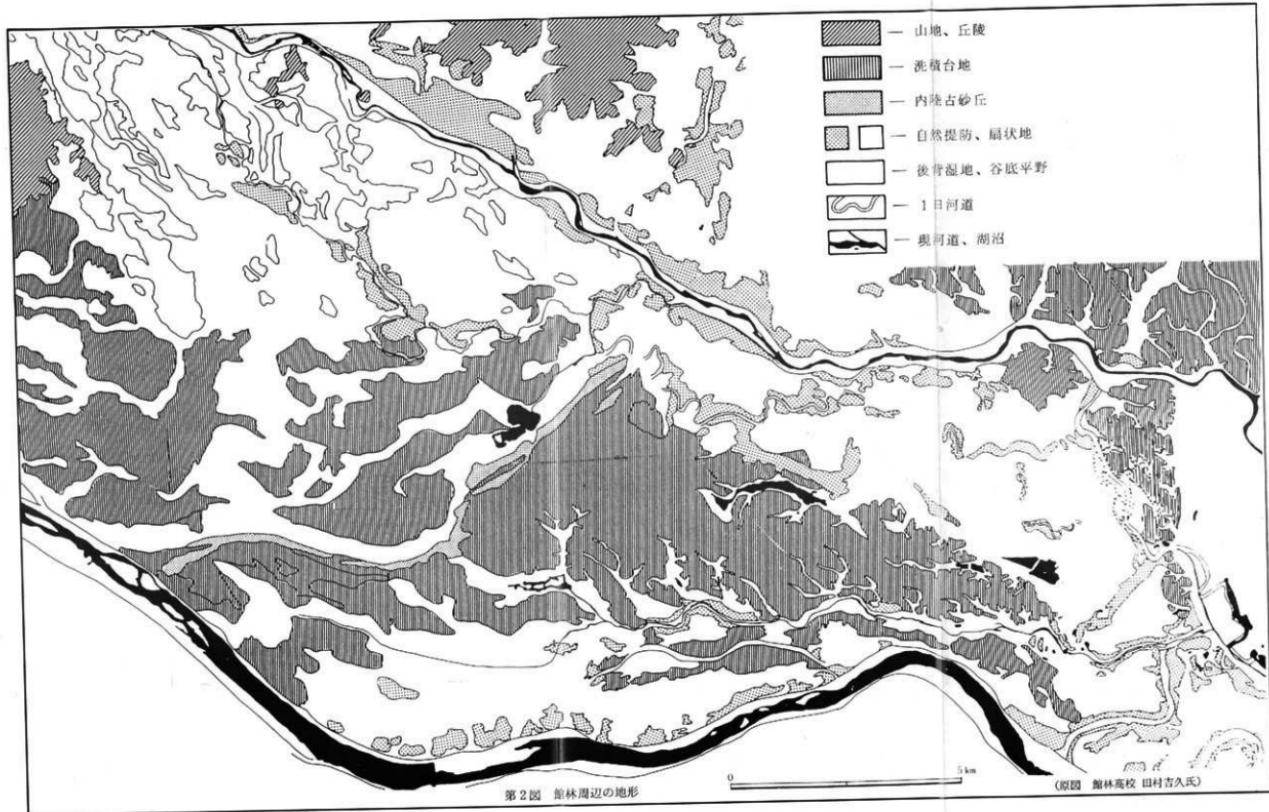
低地帯は、洪積台地の北が、渡良瀬川、南が利根川によって造られた沖積地で、その中に、多くの池沼群と、旧河道を残す。

古代人類は、この台地の縁辺部に多く足跡を残している。彼らの生活は、これらの沼や川に大きく作用されたことが、遺跡の分布によって明確である。第2・3表は、市内の遺跡を、表探と発掘資料によって時代別に分けたものであるが、池沼や河川によって時代差が表われている。旧石器時代の遺跡は、近藤沼、多々良沼（内陸古砂丘上）沿岸に多く確認され、縄文時代になると城沼や、旧矢場川、茂林寺沼、蛇沼の周辺にうつっていく。縄文時代も、早期・前期になると、旧矢場川沿岸、茂林寺沼蛇沼周辺に多く分布する。弥生時代の遺跡で明確に確認されているのは、道溝遺跡しかないが、土器片は、数ヶ所で確認されている。古墳時代になると遺跡は全域に広がる傾向を見せるが数は少ない。城沼の南岸や多々良沼沿岸に集中がみられる。

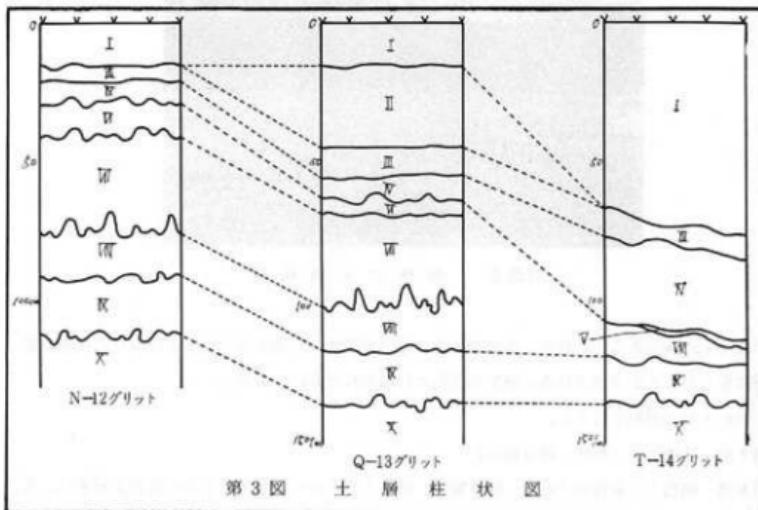
間船遺跡は、市街地の東南部、蛇沼の東岸、蛇沼に突出する舌状台地上に位置している。

蛇沼の水面から約7mの高さを持ち、周辺の水田から3mの比高を持つ高台上にある。





第三章 遺跡の土層



第3図 土層柱状図

土は、古いものは下位に位置し、新しいものは上位に位置している。これは『土層累重の方測』と呼ばれ、その地点が、断層やしお曲によって逆転していないかぎり成り立つ。

土層とは、土砂や化石などがつかなってできている地下の層であり、これを観察することで、土の古さや新しさを知ることができ、一つの層の精査することによって、その上が、どこから運ばれたのか、その土が積った時の状況がどうだったのかを知る手がかりを得ることができる。

考古学においてこの法則は、大変役に立つ。土器や石器の出土する層を比較して、時代の新旧を決定できるし、土の重なり具合や、その土に含まれているもの調べることで、当時の自然環境を知ることができる。土の色のちがいは、地面に掘り込まれた、家の跡や、穴の跡を教えてくれるのである。

間堀遺跡は、蛇沼の東岸、蛇沼に突き出した馬背上の台地上に位置している。現表では、一見平坦にみえたこの台地も、土を一枚づつ剥いで行くと、昔の姿を表わした。

第3図は、間堀遺跡の中央部を横断する土層観察用の畔の状況を模式化したものである。

これを見ると本遺跡の表土は、そのほとんどが耕作土である。台地上では、30cm、斜面部で



写真6 遺跡の土層状況

は深く105cm程ある。これで、かなり最近に近い時期に、台地上の土を下方に流し、台地の形を成形したことが予想される。陸田作成時に行なわれたものであろう。

次に土層の説明を行うと、

第I層 暗褐色土（粘性、繊り無し）

第II層 褐色土（粘性やや有り、繊り無し、層の上方にロームが多く下方に黒色土が多い、人為的搅乱土）

第III層 灰褐色土（粘性無く繊り有。細砂混入サラサラしている。斜面部の層下方には、鉄分の沈殿がみられる。）

第IV層 暗褐色土（粘性弱く、繊りやや有り。黒色土とロームの混層、台地上からの客土）

第V層 灰白色土（粘性無く、繊り無し、テフラ純層）

第VI層 明褐色土（粘性やや有、繊りやや有、ソフトローム層）

第VII層 黄褐色土（粘性有り、繊り強い、ハードローム層）

第VIII層 淡褐色土（粘性強、繊り有り、暗色帶への漸移層分）

第IX層 暗褐色土（粘性有り、繊り強い、暗色帶）

第X層 黄白色土層（粘土質のローム層、水を含み、白っぽく変色している。特にT-14グリットで著しい。）

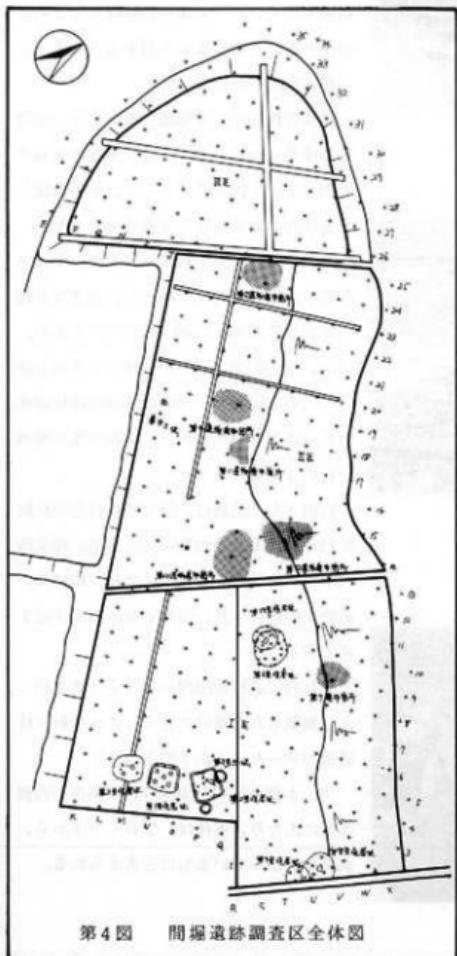
以上の通りである。

遺構が確認されたのは、耕作土下の第VI層面である。

第IV章 調査の内容

1. 調査の方法と経過

間堀遺跡は蛇沼の東岸、沼に突出する馬背状の台地状に位置する。台地は基部で幅100m、先端部で35m、長さ140mの舌状台地である。



調査は、調査区域の全体に、一辺4mのメッシュをかけ、調査区を横断する土層観察用の縦（セクションベルト）を残し、表土を剥ぎとるグリット方式をとることとした。

表土は、台地の南側が掘削されていたのでその土層断面を参考にブルドーザーを使用して剥ぎとることとした。

グリットは、地形に即し、東西に0～33列、南北にE～X列設定することができた。

表土は、第3図が示すがごとく台地上では30cm、斜面部下では105cm程であった。又、セクションベルトの関係から調査区をI区・II区・III区と仮称した。

表土剥ぎは、耕作物の関係からI区南半分（J～Q-3～12グリット）・II区・III区と進めていったが、III区においては、土層の逆転がみられ、過去に整地されていることが判明したため調査を放棄することとした。I区北側については、耕作物収穫後実施するものとした。



写真7 調査風景(1)



写真8 調査風景(2)



写真9 調査風景(3)

表土剥ぎの時点から多量の遺物が検出され、遺構の存在が予想された。特にⅠ区においては縄文時代中期の、Ⅱ区においては、同前期の遺物が多い傾向を見せた。

ブルドーザーによる表土剥ぎは、遺構の破壊を考え、ロームより10cm程上でとめ、のこりは、人力によって剥ぎとることとし遺構の検出に努めた。

遺構の検出は、予想通り難かしく、遺物の集中地点に、トレンチ等を掘るとともに遺物のドット図を作成しつつ、平面確認と断面確認による方法をとることとした。

現表では、台地末端まで平坦だったこの台地も、調査が進んで行くと、調査区北側の半分は斜面で、湿地へとづいており、当時の生活範囲は、かなり狭いことがわかると來ると同時に、平坦な部分には住居址、斜面肩部及び斜面部には、遺物の集中箇所が検出されるに至った。

検出された遺構は、縄文時代前期の住居址1軒、同時期の遺物集中箇所5基、縄文時代中期の住居址6軒、土塙2基、同時期の遺物集中箇所1基、時期不明の集石土塙1基である。

これらの遺構の配置の状況を考えて行くと、掘削された部分にさらに3~5軒の住居址があったことが予想される。

又、本調査区の住居群は、集落の西側部分にあたり、本体は、プレハブ下から、東側に広がっているものと考えられる。

2. 遺構と遺物

第1号住居址



写真10 第1号住居址

第1号住居址は、台地上の平坦部M・N - 3・4グリットで検出された。

確認面はローム面であった。表土中よりこの周辺は、遺物が多く出土しており、遺構の存在が予想されたが、ローム面まで、表土を排除したところ住居址として確認された。

平面形は、 $450 \times 410\text{ cm}$ の隅の丸い台形を呈する。

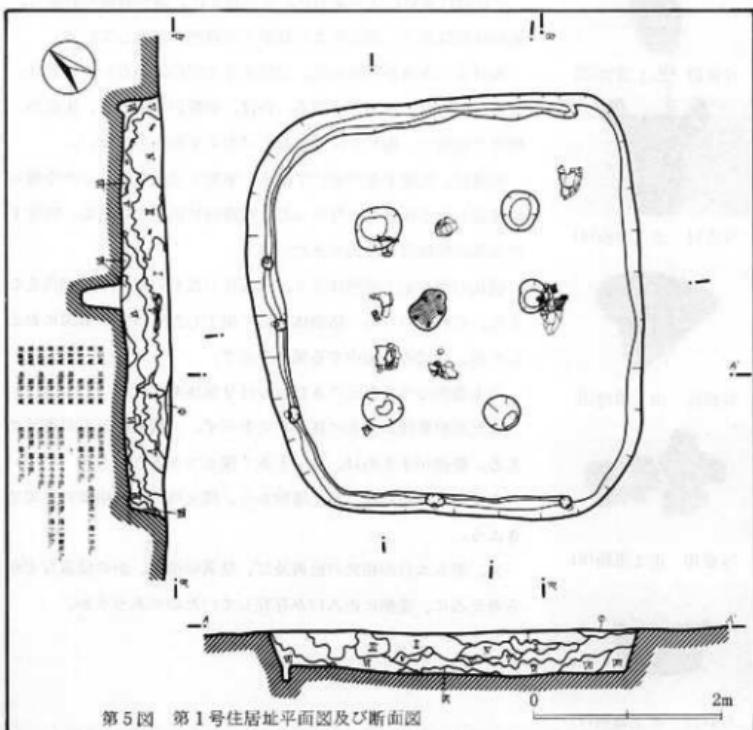




写真11 出土遺物(1)



写真18 出土遺物(8)



写真19 出土遺物(9)



写真12 出土遺物(2)



写真20 出土石器



写真13 出土遺物(3)



写真14 出土遺物(4)



写真15 出土遺物(5)



写真16 出土遺物(6)



写真17 出土遺物(7)

壁はほぼ垂直に立ちあがり、その高さは、38~44cmを計測し、遺存状態は良く、覆土中より数多くの遺物が出土している。

床はよくふみかためられ、ほぼ水平で凹凸は少ない。柱穴は、5本確認され、五角形に開く。炉は、地焼炉であるが、床面が、焼けた程度で、掘りくぼめられておらず焼土も少ない。

壁溝は、東壁下をのぞいて開る。東壁下はサブトレンチを掘って確認したが検出されなかった。壁溝内に南壁下に2基、西壁下に3基の壁柱穴が検出できた。

前述の通り出土遺物は多く、圓面化したものだけで2,000点をこえる。これらのうち一括個体として出土したものを平面図におとしたが、炉周辺に集中する傾向を示す。

出土遺物のうち復元できたものは9個体あった。

まだ遺物整理が完全に終了しておらず、一括個体のみの復元である。整理がすすめば、もっと多く復元できると思う。

本住居址の時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉に比定できよう。

又、第5本目の柱穴の位置及び、壁溝の位置、炉の位置などから考えるに、東側に出入口が存在していたのであろうか。

第2号住居址

第2号住居址は、台地上の平坦部、第一号住居址の北方1m、O・P-3・4グリットで検出

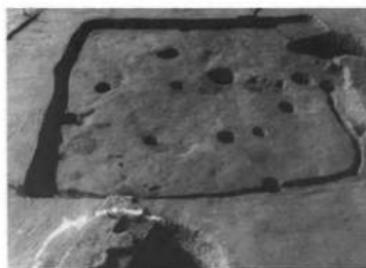


写真21 第2号住居址

された。

本住居址は第3号土塹との切り合いがあり、土塙の方が、本住居址より新しい。

確認面はローム面である。

住居の平面形は、490×460cmの不整形方形状を呈す。

壁はほぼ垂直に立ち上がりその高さは、10～20mを測る。

遺存状態は普通である。

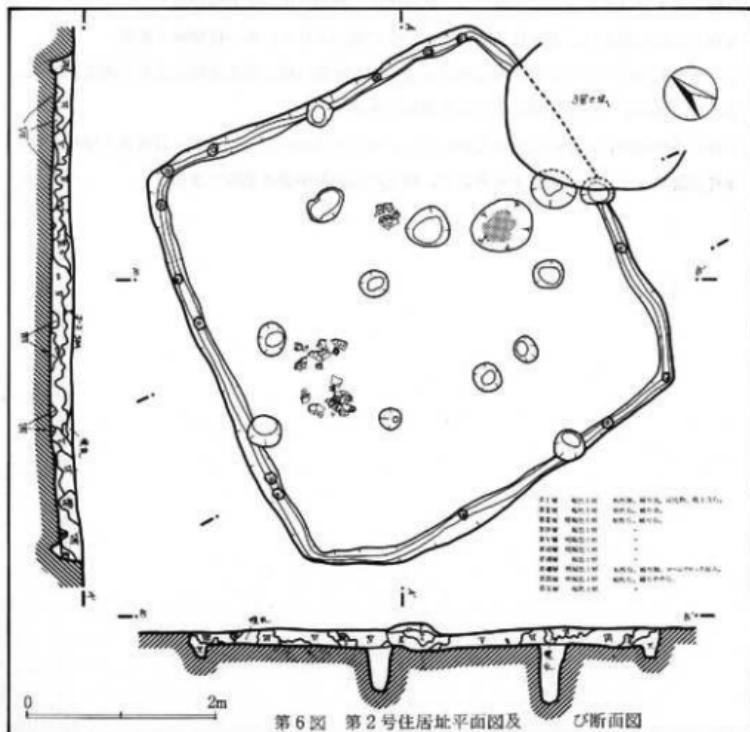




写真22 出土遺物(1)

床はよく踏みかためられ、ほぼ水平で間凸は少ない。柱穴は13本確認された。その配列はアトランダムである。そのうち四壁各々の中央部に、比較的大きな柱穴がある。

炉は地焼炉である。床の北にかたよって確認された。その規模及び平面形は、 $57 \times 55\text{cm}$ の階円形を呈す。床をほんの少し掘くぼめた程度で、焼土等の堆積は少ない。

壁溝は、幅10~25cmで全周する。壁溝内には、北壁にそって1個、西壁に5個、南

壁に5個、東壁に3個、計14個の壁柱穴が確認された。

遺物の出土量はそれほど多くない。一括個体は、南側に集中する傾向をもつ。

写真に上げた遺物は、北壁柱穴の右側に逆位で埋められていた一括個体である。

全部は復元されていないが、口縁部はゆるやかな波状口縁、瓜形連続文と羽状繩文を施す。

器形は、頸部が「く」字状にくびれる深鉢であろう。

本住居址の遺物は、そのほとんどがもろく、取り上げには、バインダー17容液を使用した。

本住居址は、その出土遺物から考えて、縄文時代前期中葉に比定できる。



第3号住居址

第3号住居址は、台地上の平坦部、第一号住居址の南方1m、L・M-3・4グリットで検出された。確認面はローム面であった。表土中より、周辺は遺物の出土が多く遺溝の存在が予想されたが、表土を排除したところで確認された。



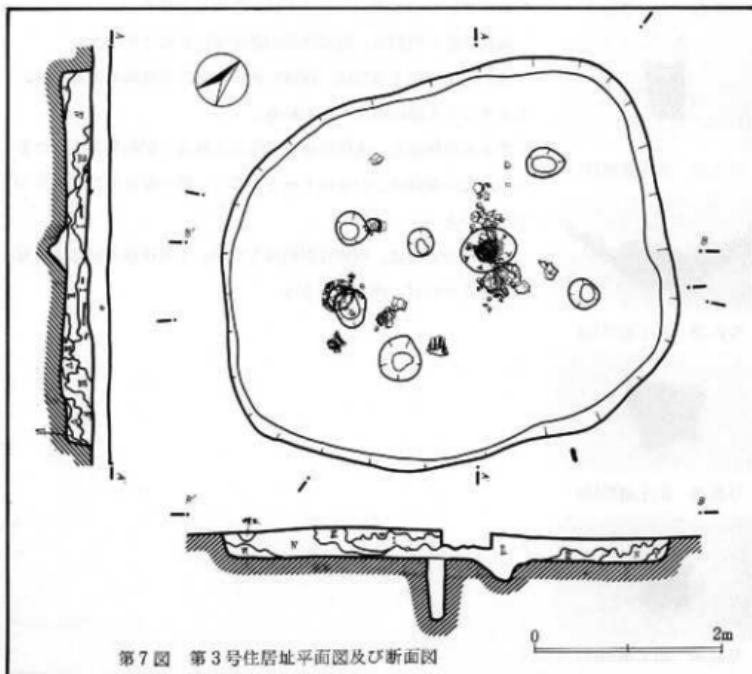
写真23 第3号住居址

平面形は、475×400cmを計るたまご形を呈する。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、その高さは25~30cmを計測する。遺存状態は良好で、覆土中より多くの遺物が集中している。

床は、よくふみかためられ、ほぼ水平で凹凸はない。

柱穴は、6本確認された。うち4本は、



第7図 第3号住居址平面図及び断面図



写真24 出土遺物(1)



写真31 出土遺物(8)



写真32 出土石器



写真25 出土遺物(2)



写真26 出土遺物(3)



写真27 出土遺物(4)



写真28 出土遺物(5)



写真29 出土遺物(6)



写真30 出土遺物(7)

四辺形に位置され、5本目の柱穴は、長軸上に位置している。

炉は地床炉である。やや深く掘り込まれているが、焼土の層はうすい。壁溝はない。

出土遺物は多い。図面化したものだけで、950点あった。これらのうち、一括個体として出土したものだけを平面図に掲げた。

炉周辺及び、南側に集中する傾向を示す。

このうち復元したものは、8個体ある。まだ遺物整理が完了しておらず、もっと多くの遺物が復元できると思う。

本住居址の時期は、縄文時代中期中葉に比定できよう。

本住居址の出土遺物は、深鉢の他に浅鉢、台付鉢がある。又、ミニチュア土器の出土もみられる。

第1号住居址と、本住居址の遺物から見ると同時期のものであるが、その間隔は、わずか1mしかなく、同一存在でないことが予想される。

出入口の方向は、明確な根拠はないが、1号住居と同じような考え方をすれば、南側であろう。



第6号住居址

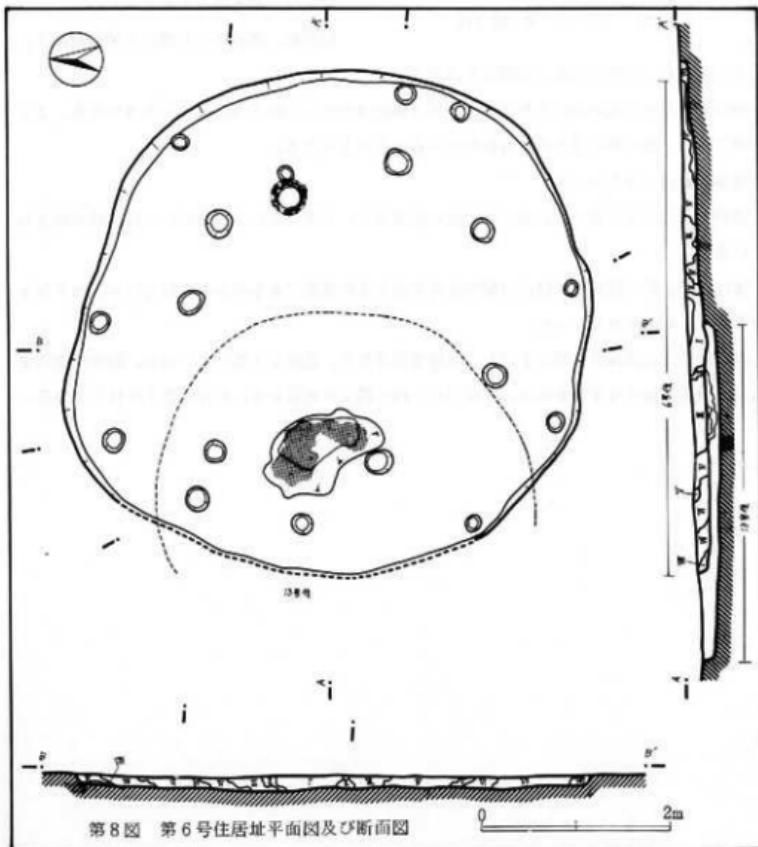


写真33 第6号住居址

第6号住居址は、台地上の平坦部、I区の西方P・Q～9・10グリットに位置する。第13号住居址との切り合いがあり、本住居址の方が新しい。

確認面は、ローム面である。

本住居址は、確認がなかなか困難であったが、掘り下げ中に、一括個体の出土があり、周辺を精査することで検認されたものである。



第8図 第6号住居址平面図及び断面図



写真34 出土遺物(1)

本住居址は、本遺跡中最大のものである。その規模及び平面形は、 $550 \times 540\text{cm}$ を計るほぼ円形である。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がると思われる。現高は、10cm前後である。

遺存状態は、普通である。

床は、よく踏みかためられ、しまっている。ほぼ水平で凹凸は少ない。

柱穴は、18本確認された。

配列は、壁直下及び壁から90cm前後で、

二重にめぐり、外側に10本、内側に8本有る。

炉は地焼炉でかなり西にかたよった位置で確認された。 $130 \times 85\text{cm}$ の大きさをもち、よくやけている。焼成部は2ヶ所に分かれているようにも見える。

壁溝は確認できなかった。

遺物は、ほとんどないが、東にかたよった部分で、上部を欠いた浅鉢が、一括状態で出土している。

本住居は、炉の状態や、柱穴の配列を考えると2軒重複であるのかもしれないが、セクション等では、確認できなかった。

本住居出土の浅鉢を写真に上げた。口縁部付近及び、底部を欠損しているが、腹部は全周する。二重の隆線でうす巻を描き、区画された内に網文を充填する。有孔の把手を付している。

第8号住居址

第8号住居址は、台地の肩部、調査区域の東端、T・U-0・1グリットで検出された。

住居の東側三分の一は、調査区域外へ広がる。第9号住居址との切り合いがあり、本住居址の方が新しい。

確認面は、ローム層の上面である。表土剥離中から、多くの遺物が出土しており遺構の存在



写真35 第8号住居址

が予想されたが、ローム面で住居址として確認された。

平面形は、確認された部分で、 $550 \times 450\text{ cm}$ を計測し、楕円形を呈すると考えられる。

壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、その高さは、20mをはかる。遺存状態は普通である。

床はよくあみかためられ、ほぼ水平で間

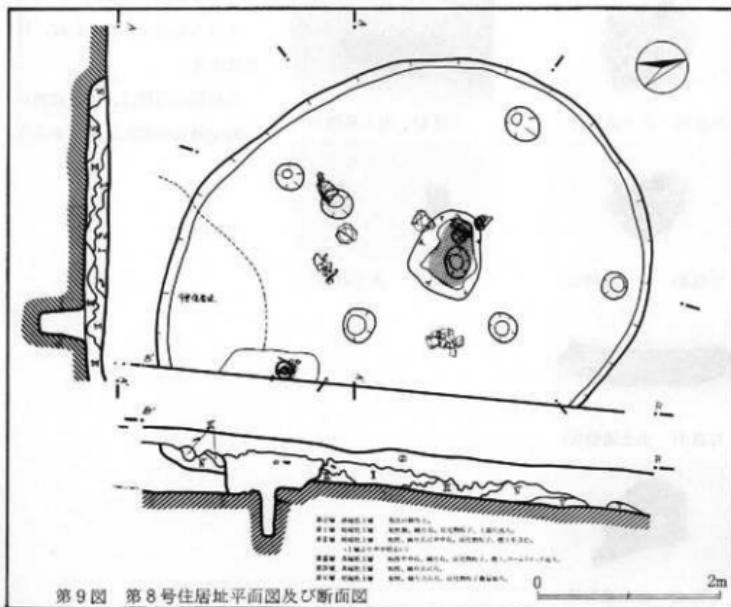




写真36 出土遺物(1)



写真43 出土遺物(8)



写真37 出土遺物(2)

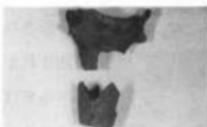


写真44 出土遺物(9)



写真38 出土遺物(3)



写真45 出土遺物(10)



写真39 出土遺物(4)



写真46 出土遺物(11)



写真40 出土遺物(5)

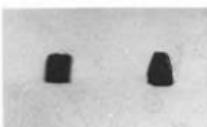


写真47 出土石器



写真41 出土遺物(6)



写真42 出土遺物(7)

く、黒色土が床となっている。

柱穴は、7本確認された。その配列は一定でない。

炉は、地床炉である。住居のはば中央やや北よりの位置にある。

やや深く掘り込まれており、中央部はピット状になっている。

焼土は、かなり堆積しており、10cm程あった。

壁溝はない。

出土遺物は多い。圓面化したもののだけでも757点あった。炉を中心とし、やや南にかたよって出土する傾向を示す。

このうち復元したものは、11個体ある。

本住居の時期は、出土遺物から縄文時代中期に比定できよう。

第9号住居址

第9号住居址は、台地上の平坦部、調査区の東端、T-0・1グリットに位置する。

第8号住居址との切り合いがみられ、8号住居の方が、本住居よりも新しい。

又本住居址は、大半が、調査区域外にのびている。

確認面はローム層である。第8号住居址を確認する際、平面プランにより切り合いが確認された。

平面形は、梢円形を呈すると思われ、その規模は、確認された範囲で、350×300cmを計る。

本遺跡で確認された住居では最小のものである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、その高さは50cmを計測する。

遺存状態は良い。覆土中より多数の遺物が出土している。

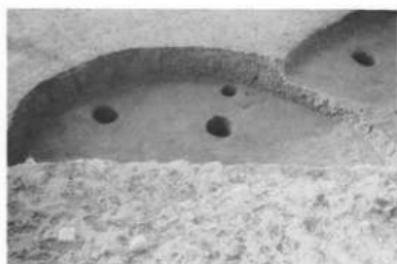


写真48 第9号住居址

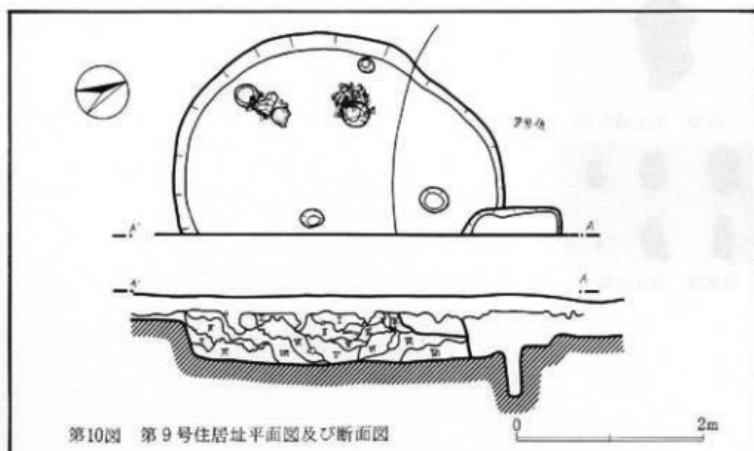
床は、よく踏みかためられたロームで凹凸は少ない。ほぼ平坦である。

柱穴は、5本確認された。配列は一定ではない。その規模は20~35cm、深さ20~40cmを計測する。

炉は確認できなかったが、調査区域外に存在しているものと考えられる。

壁溝は確認できなかった。

出土遺物はかなりあるが、破片のものが



第10図 第9号住居址平面図及び断面図



写真49 出土遺物(1)



写真50 出土遺物(2)



写真51 出土遺物(3)



写真52 出土遺物(4)



写真53 出土遺物(5)

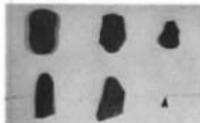


写真54 出土石器

多い。図面化したもので206点あった。

柱穴のそばで一括個体の出土がみられる。

このうち復元したものは、5個体ある。

本住居址も、完全に遺物整理が終了していないため、まだ多くの土器が復元できると思われる。

本住居址の時期は、その出土遺物から縄文時代中期中葉に比定できよう。



第13号住居址

第13号住居址は、台地の平坦部、P・Q～9・10グリットに位置する。

第6号住居址と重複関係にあり、6号住居の床面で本住居が確認された。

確認面は、ローム面である。

本住居址は、確認がかなり困難であった。6号住居を調査中、がが新たにみつかり、住居周辺および床を精査したところ、本住居址が確認できた。

その規模及び平面形は、375×360cmを測るほど円形を呈する。

壁はほぼ垂直に立ちあがり、現高は、15cm前後である。



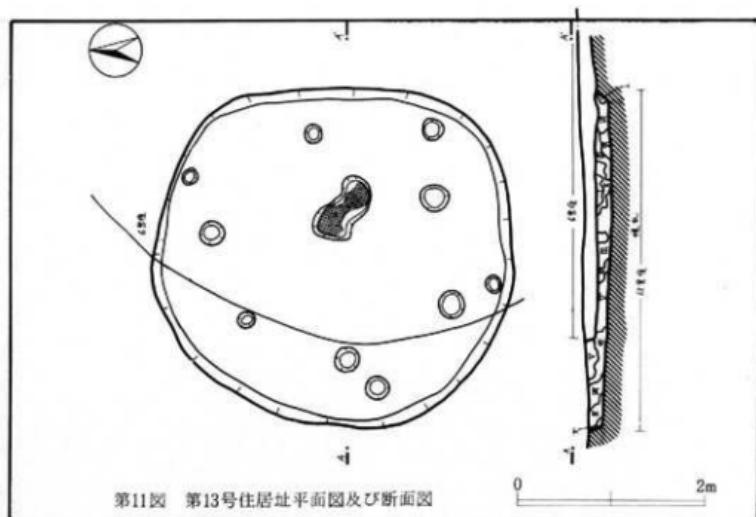
写真55 第13号住居址

遺存状態は、6号住居址のため、あまりよくない。

床は、あまりふまれておらず、6号住居址側ではやや深くなる。凹凸は少ない。

柱穴は、10本確認された。配列は一定ではないが、壁下約50cmでめぐる。

炉は地焼炉で、東へかたよった位置にある。75×45cmの瓢箪形を呈する。よく焼けている。第6号住居址の炉と重複をし



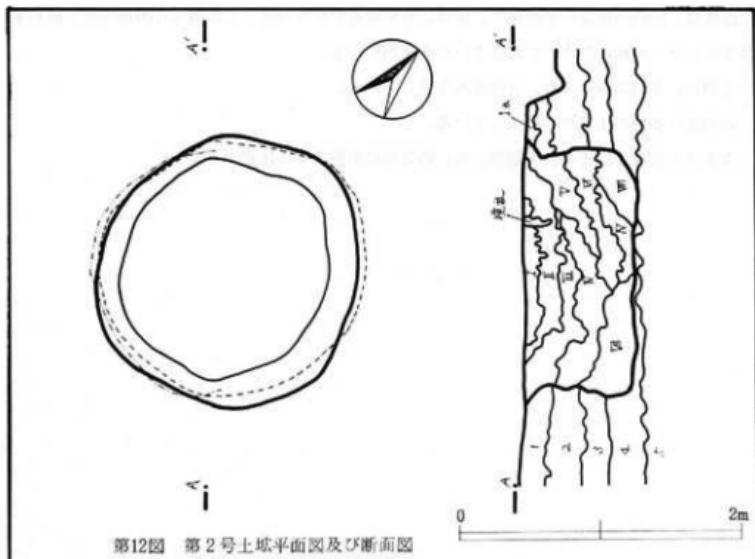
第11図 第13号住居址平面図及び断面図

ており、焼成部が2箇所あることから本住居が確認されたものである。
壁溝は確認されなかった。

遺物の検出はなかった。しかしながら、本住居の時期は、平面形、6号住居址との切り合い
から縄文時代中期後葉と考えてよかろう。



第2号土塙



第12図 第2号土塙平面図及び断面図

第2号土塙は、台地上の平坦部、第2号住居址となりあって検出された袋状土塙である。

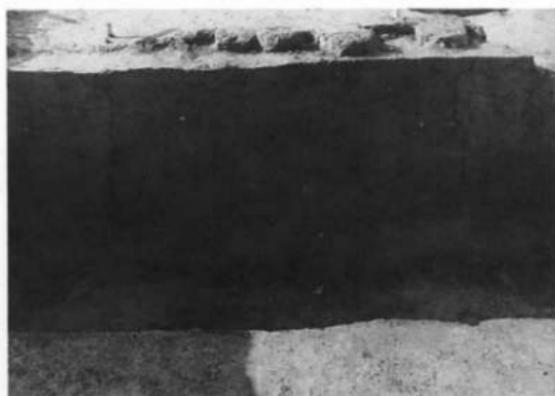


写真56 第2号土塙断面

第2号住居とは、わずか20cm程はなれて検出された。

その平面形及び規模は、 $195 \times 175\text{ cm}$ の円形を呈する。

調査は、オーバーハングの状況及び、断面の土層状況を見ることに重点をおいたため、

平載にして、北半分の破壊を前提として、調査を行った。

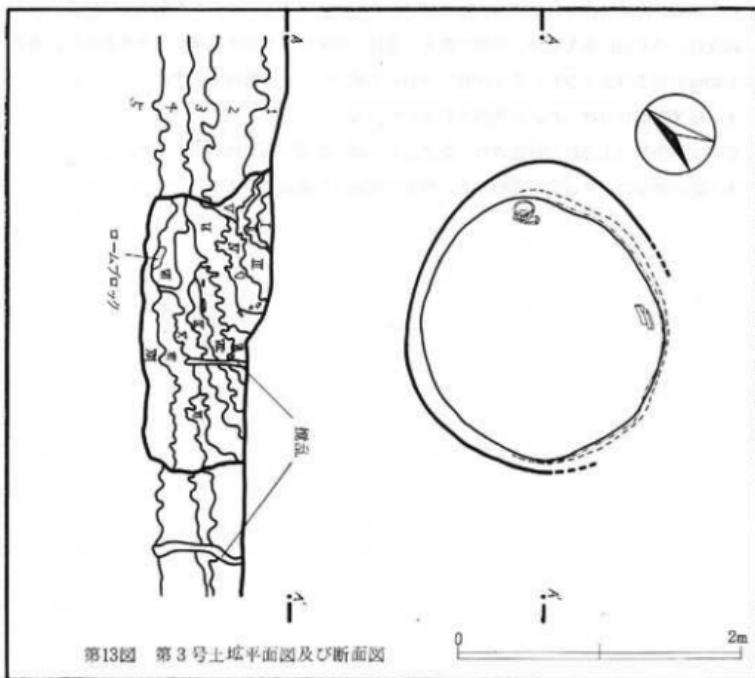
この結果、土壠の深さは79cm、ブラックバンド中で床となっている状況が確認された。 坡底は、凹凸の少ない平坦面で、壁は、ややゆるやかに内湾して表面より80cmの所で最もすばり、ラッパ状にひらいて坡口にいたる断面を示す。

土層は、9層に分けられ、自然流入を呈している。

城内より多數の土器片が出土している。

本土城の時期は、その出土遺物から、縄文時代中期後半に比定できよう。

第3号土塙



第13図 第3号土塙平面図及び断面図

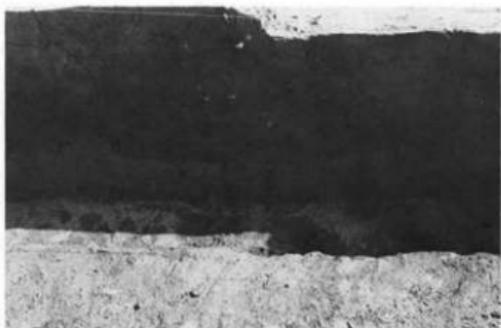


写真57 第3号土塙断面図

第3号土塙は、台地の平坦部、第2号住居址と切り合って、P-4グリットで検出された袋状土塙である。

第2号住居址と切り合いがみられ、本土塙の方が新しい。その平面形は、220×200cm程のたまご形を呈する。

調査は、オーバーハングの状況及び、断面の土層状況を見ることに重点をおいたため

西側半分の破壊を前提に調査を行なった。

この結果、土塁の深さは140cm、塙底は、ブラックバンド下のロームを利用している。

塙底は、やや凹凸があるが、平坦である。壁は、ややゆるやかに内湾して立ちあがり、表面から40cmのところでくびれ、ラッパ状にひらいて塙口にいたる断面を示す。

土層はXIII層に分けられ、自然流入を呈している。

塙内より多量の土器片が検出され、北壁ぎわでは、底部一括個体が出土した。

本土塙の時期は、その出土遺物から、縄文時代後半に比定できよう。



西側半分の破壊を前提に

調査を行なった。

この結果、土塙の深さは

140cm、塙底は、ブラック

バンド下のロームを利用

している。

壁は、ややゆるやかに内

湾して立ちあがり、表面

から40cmのところでく

びれ、ラッパ状にひらいて

塙口にいたる断面を示す。

土層はXIII層に分けられ、

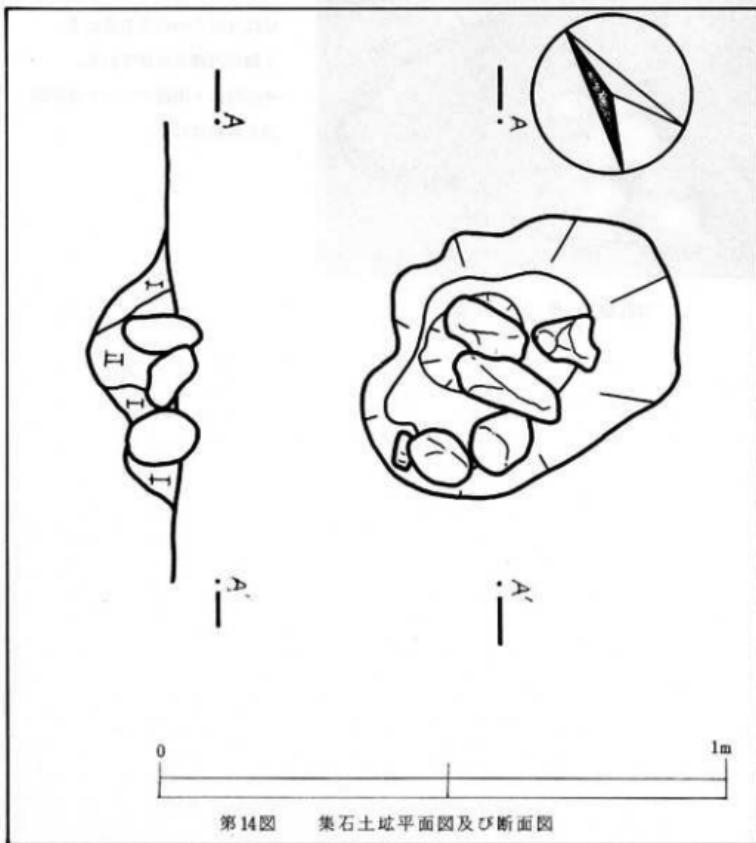
自然流入を呈している。

塙内より多量の土器片が検出され、北壁ぎわでは、底部一括個体が出土した。

本土塙の時期は、その出土遺物から、縄文時代後半に比定できよう。



集石土塙



第14図 集石土塙平面図及び断面図

本集石土塙は、台地上の平坦部、K-18グリットで検出された。

調査区域内で唯一の集石土塙である。

表土剥土中、本調査で最初に確認された遺構である。

本遺跡では、台地の中央より北側に遺構が多く確認されているが、台地南側で確認された唯一の遺構である。（ただ台地南側はすでに掘削されている。）

その規模及び平面形は $60 \times 45\text{cm}$ の楕円形を呈する。

埴底は一定でなく、深さは、最も深い所で20cmを計る。



写真58 集石土塁

壁はなだらかに立ちあがる。

6個の円碟を生けている。

その時期・用途については不明。

出土遺物はない。



第V章 調査のまとめ



第15図 縄文時代の海岸線と貝塚の分布図



写真59 縄文時代の住居内の様子

(館林市立第一資料館 特別展
「大地の証言」・展示より)

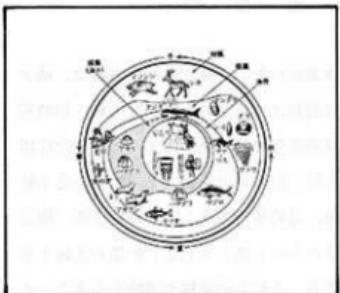
本遺跡において確認された遺構は、縄文時代前期に比定される住居址1軒、同時期の遺物集中箇所5基、縄文時代中期の住居址6軒、同時期の貯蔵穴と考えられる土鉢2基、遺物集中箇所1基、時期不明（縄文時代のものと考えられる）の集石土鉢1基である。これらの遺構や遺物をみると、この台地上に残された生活痕は、ほとんどが縄文時代のものといえよう。

一口に縄文時代といっても、かなり長い時代にわたっているのである。

縄文時代の始まりは、今からおよそ1万年前までさかのばると言われている。長崎県福井洞穴遺跡では、C¹⁴測定によると 12,700 ± 500 年という値を示す土の中から土器片が出土している。その終りは、水稻栽培が始まるB.C. 300年頃までつづいたとされている。関東地方への水稻栽培の導入はかなりおくれたと考えられているが、それでも、西暦0年ぐらいには導入されたと考えると、縄文時代は8,000年もにわたるのである。この間、狩猟採集を中心とした生活をしていたことになる。

この期間を考古学では、土器の形態から早・前・中・後・晩の5期に区分しているが、この一時期だけでも、西暦より長いものであることがわかる。

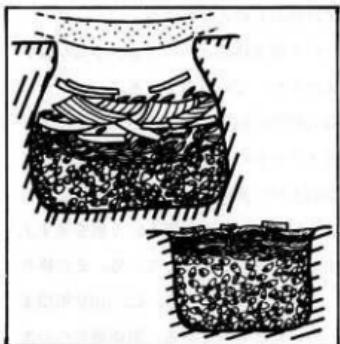
人々が生活する上で、自然要因は大きく影響する。乾地や湿地、沼や川は、人々の生活空間を、暖い、寒い、乾燥、湿気、風



第16図 縄文カレンダー（小林連雄氏原案） 貝貝塚は、最も内陸部に存在する貝貝塚である。この

が強いとかは、住みやすさを左右する。

縄文時代の土地の様子や気候は、現在とは同じではない。縄文時代の前期は、縄文海進と呼ばれ、海面が今より高く、渡良瀬遊水地あたりまで海であったといわれている。第15図は、関東地方の縄文時代の海岸の様子と貝貝塚の分布の様子から想定したものである。貝貝塚の多くは、今の海岸線から、約10km程奥に確認されることが多く、今より海面が高かったことを予想させる。栃木県那須山貝貝塚や、群馬県海老



第17図 縄文時代の貯蔵穴

と、今の12畳ぐらいである。その一間が、台所であり、リビングであり、寝室であったと考えると、1軒の住居に住める人数は想像がつく。

一つの集落には、何軒ぐらいの家があって、何人ぐらいの人々が生活していたのだろうか。今残されている住居がすべて同一時期に作られたものではない。改築もあっただろうし、建てかえもあったであろう。又、再び、同じ土地に帰ってきて、家を造ったことも考えられる。今に残された住居址のうち何回かにわたりて集落が営まれていたのである。

縄文時代の人々の生活を考える時、人々の造った道具等もおおいに資料となる。

道具は、日々の生活の中で、必要にせまられ、造られ、形を変えてきたものである。

なべや食器、貯蔵用の器として使われたであろう土器は、生活必需品でありながら、その器面に描かれた文様は、縄文人達の美意識や精神面を表わしているであろうし、弓矢に使われた

第3表 住居址一覽表

住居 No	規模	形態・平面形	主軸方位	壁溝	柱穴	炉	規模	備考
第1号住居址	cm 450×410	隅丸合形	N-49°-E	東壁をのぞきめぐる	主壁 5本 壁 5本	中央地焼炉	cm 45×40	
第2号住居址	cm 490×460	不整形方	N-70°-W	全周	主壁 13本 壁 14本	北にかたよる地焼炉	cm 57×55	西壁中央に大きな柱穴有り
第3号住居址	cm 475×400	たまご形	N-36°-E	無し	6本	やや東へよる地焼炉	cm 60×45	
第6号住居址	cm 550×540	円形	N-22°-W	"	18本	西にかたよる地焼炉	cm 130×85	柱穴が2重にめぐる
第8号住居址	cm (550)×450	薄円形	N-46°-W	"	7本	北による地焼炉	cm 95×80	炉内に柱穴有り
第9号住居址	cm (350)×300	"		"	5本	不明		半分調査区外へ
第13号住居址	cm 375×360	円形	N-52°-W	"	10本	東へかたよる地焼炉	cm 75×45	

であろう石簇。土掘りや、木切りに使われたであろう石斧は、その用途の中で、くふうされ、変化していったであろうことが予想される。

間堀遺跡の発掘で確認され、発見された土器や石器をはじめとする資料については、まだまだ整理や調査が充分に行なわれていない。復元された土器についても、一括として発見されたものだけで、出てきたものすべてを行なったわけではない。しかし、この一部のものからも、多くのことを考えることができるのである。

間隔遺跡の発掘成果は、繩文時代のすべてを語ってくれるものではない。環境がちがえば、地域がちがえば、気候がちがえば、人がちがえば、人達が残してきたものはすべてちがって来るのである。

私達は、問屋道筋の発掘調査を通して繩文時代の生活のいくつかを考えることができた。

間掘遺跡が、このような繩文時代の世界にあってどのように位置づけられていくかは、資料の整理と精査を実施するとともに今後の課題としている。

第4表 出土遺物一覧表

遺物名	遺物No	残存率	器 形	胎 土	器 厚	色 調	燒 成	施 文	備 考
第1号	1	70%	深鉢	金雲母	11~14mm	淡褐色	良 好	列点隆脊、鰐文、沈線	口縁に1~2個の把手
	2	口縁のみ	〃	〃	9~12mm	赤褐色	〃	隆帶、波状沈線、半載竹青文	把手2段
	3	20~30%	〃	長 石	11~13mm	〃	〃	隆帶上に半載竹青、沈線	三角の把手を付す
	4	90%	〃	〃	8~9mm	赤褐色	〃	隆線、細繩文	耳状把手2個付す
	5	25%	浅鉢	〃	9~14mm	暗褐色	〃	口厚部が外反、レリーフ状文	補窓穴、良く研磨
	6	30%	深鉢	長 石	12mm	〃	良	隆帶、沈線、竹青文	無文
	7	底部のみ	〃	金雲母	9~14mm	明褐色	良 好	底部から大いに隆起直上	
	8	口縁半周	〃	〃	8~9mm	淡褐色	良	曲線隆脊、刺穴文	
	9	20%	〃	〃	13~15mm	〃	良 好	キャタピラ文、沈線	
2住	1	30%	深鉢	鐵 粉	11~14mm	黃褐色	良	口縁部爪形文、羽状繩文	波状口縁、補窓穴
第3号	1	完 形	浅鉢	方解石	10mm	赤褐色	良	レリーフ伏文、無文	良く研磨
	2	50%	深鉢	〃	8~10mm	褐色	不良	隆帶沈線、すり消し繩文	
	3	60%	〃	長 石	9~11mm	明褐色	良	波状くし絵文	
	4	50%	〃	〃	5~7mm	淡褐色	良 好	無文	ミニチュア
	5	60%	浅鉢	方解石	10~12mm	〃	〃	レリーフ伏文、うず巻、無文	大型
	6	50%	深鉢	〃	8~10mm	明褐色	不良	隆帶、キャタピラ文、沈線	焼成ムラ有り
	7	脚のみ	合付鉢	〃	8mm	〃	良	繩文、キャタピラ文、小穴4ヶ	
	8	50%	深鉢	方解石	11mm	〃	良 好	繩文、隆帶、うず巻	内側に炭化物
6住	1	50%	浅鉢	小 砂	11~12mm	明褐色	良 好	2重隆脊、うず巻	春孔把手
第8号	1	40%	深鉢	〃	11~13mm	暗褐色	良 好	隆帶区面、キャタピラ文	有孔把手
	2	80%	〃	方解石	9mm	赤褐色	良	沈線	内側に炭化物
	3	80~90%	〃	小 砂	8~14mm	暗褐色	〃	鐵沈線	塵もうが著しい
	4	20%	〃	〃	10~12mm	明褐色	〃	隆帶、キャタピラ文	
	5	つば形	石 英	10~13mm	淡褐色	〃	太い沈線	口縁外反	
	6	口縁半周	浅鉢	〃	10mm	〃	良 好	半載竹青、ツバ状突起	
	7	把 手	小 砂	13~15mm	明褐色	良	キャタピラ文、繩文	表裏と装飾、有孔	
	8	40%	深鉢	長 石	8~10mm	暗褐色	良 好	隆帶、キャタピラ文、沈線	表裏口縁
	9	40%	〃	〃	10mm	淡褐色	良	隆帶、キャタピラ文、無文	内側に炭化物
住	10	20%	〃	長 石	10~11mm	〃	〃	隆脊	
11	底部のみ	〃	〃	12~13mm	明褐色	〃	無文		
第9号	1	底部のみ	〃	〃	12mm	淡褐色	不良	無文	
	2	30%	深鉢	〃	12~14mm	暗褐色	良	隆帶、沈線、刺突文	有孔把手
	3	把手のみ	浅鉢	金雲母	11~13mm	黒褐色	〃	繩文、沈線	波状口縁
	4	20%	深鉢	小 砂	11mm	明褐色	不良	繩文、キャタピラ文	波状
	5	10%	〃	〃	11~12mm	黒褐色	良 好	繩文、キャタピラ文	

おわりに

間掘遺跡の発掘調査が数々の成果をあげて終了いたしました。これらの資料は、ただ「古いもの」「珍しいもの」として取り扱われるべきものではありません。これらの資料をもとに、自分達の周りを考える一つの手段として活用していきたいものです。

人々が生きていくうえにおいては、「人」を取りまく環境といったものが大きく係わります。「暑さ」や「寒さ」、「湿気」や「乾き」、「風や雨」といった気候的な環境は、「生活のし易さ」を制限し、「山や川」、「台地や湿原」といった地形的な環境は、「生活の場」を制限します。人々は、こうした自分達を取りまく環境の中で、「生活」を左右されながら、自分達の文化を築きあげてきたのです。

自然環境（古環境）と人間環境（形成環境）とは複雑に入りまじり、自然環境は、人間環境を左右し、人間環境は自然環境に順応しつつ、自然環境を変化させてきたのです。

館林地方の気温は、一年を通じて温く、雨や雪は年間を通して少ない。晴れた日が多く、特有のからつ風の吹く日も、県内では少ないといわれています。

利根、渡良瀬川という大河が造りあげた地形は、底台地と湿地と池沼群を残し、粘土や砂で形成された土壤は、館林邑楽地方を特色づけています。

このような自然環境のなかで、この調査が示すような生活がはじまり、形を変化させながら今日まで続いています。

今日のように、物質的な満足のなかで、生活自体は変化しながらも、現在でもそれを示すものが多くのこっているように、根底に流れるものは変わっていないと考えます。

「風土」とは、自然と人間のおりなすその地域独特の文化であるといつても過言ではありません。

館林においても「館林らしさ」「館林氣質」と呼ばれるものがあるはずです。画一的な生活のなかで、それが失なわれつつある今、間掘遺跡の発掘調査を通して、再度その基を確認していただると同時に、今後の「館林文化」を創造する時、一つの資料としていただければ幸いです。

多方面からの御指摘、御教示をお願いいたします。

昭和58年 3月

Journal of Multidisciplinary Studies 2003, Vol. 31, No. 1, pp. 1–20.

鶴林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集
鶴林市大字牛生田字上の森

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

館林市大字赤生田字上の前

間 堀 遺 跡

發掘調查報告書

發行：鈞林市教育委員會文化振興課

印 刷 由 摄 印 刷 所

發行年月日　昭和 58 年 3 月 31 日



文化財愛護シンボルマーク
ふる郷の文化と歴史を見なおそう